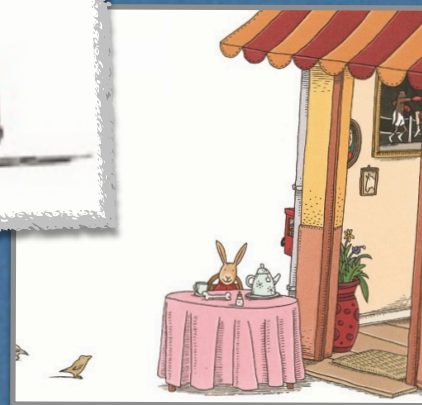


# えっ、訳でこんなに違うの？

～新訳ブームの中で、翻訳の  
楽しさ、難しさを考えてみよう！

## 世界と日本の子どもの本から



2011年12月11日 (日曜日)

13:30～16:00 (開場13:15)

### アクトシティ浜松 コンgressセンター 53・54会議室

参加費 500円 (予約申し込み制 定員100人 申し込み方法は裏面を参照してください)

#### プログラム

1. 講演「作者からみた、翻訳と創作物語の世界」 末吉暁子(童話作家)

#### 2. シンポジウム

「翻訳の楽しさ・難しさ～国際化時代の翻訳について」

パネラー： 大竹聖美 (韓国児童文学研究家) / 酒寄進一 (ドイツ文学翻訳家)

さくまゆみこ (欧米児童文学/ アフリカ文学翻訳家)

司会： 那須田淳 (作家)

主催 日本ペンクラブ 事務局 TEL:03-5614-5391 (平日午前10時～午後6時)

後援 (財)浜松市文化振興財団、(社)日本国際児童図書評議会、日本YA作家クラブ、中日新聞東海本社、静岡新聞

☆子どもゆめ基金 (独立行政法人国立青少年教育振興機構) 助成活動

## 参加申し込み方法

●往復はがきの場合：希望人数を明記して、返信はがきに氏名、住所をご記入の上、下記までお送りください。

〒103-0026

東京都中央区日本橋兜町20-3

日本ペンクラブ

「世界と日本の子ども本から」係

●e-mailの場合：件名に「世界と日本の子ども本から」参加希望とし、本文に氏名、住所、参加人数をご記入の上、以下のアドレス宛にお送りください。

secretariat03@japanpen.or.jp

☆問い合わせ先

日本ペンクラブ事務局

TEL:03-5614-5391 (平日午前10時～午後6時)

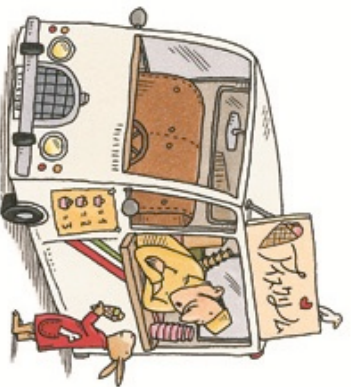
会場のご案内

アクトシティ浜松 コンgressセンター53・54会議室

浜松市中区板屋町 111番地の1

TEL 053-451-1111

<http://www.actcity.jp/about/access.php>



©フイリッパ・ヴェヒター「ローゼーのモンスタール」ヴェヒター作/酒寄進一訳(ひさかたチャイルド)より



☆出演者プロフィール☆

未吉暁子 (童話作家):

著書に『ママの黄色い子象』(講談社・野間児童文芸賞受賞) 『雨ふり花さいた』(偕成社・小学館児童出版文化賞)、『赤い髪のミウ』(講談社・産経児童出版文化賞フジテレビ賞)、『ぞくぞく村のおはけ』シリーズ(あかね書房) など多数。NHK教育テレビの『ざわざわ森のがんごちゃん』の脚本も執筆中。

大竹聖美 (韓国児童文学):

東京純心女子大学教授。研究著書に『植民地朝鮮と児童文化』(社会評論社)、訳書にシリーズ『韓国の絵本10選』(アトント新社)、イ・オクベ『非武装地帯に春がくると』(童心社)、ハク・ジエヒョン『とらとほしがき』(光村教育図書)、チェ・ヒヤンラン『十長生をたずねて』(岩崎書店) など多数。

酒寄進一 (ドイツ文学翻訳家):

和光大学教授。訳書に、ラルフ・イーザウ『ネシヤン・サーガ』シリーズ(あすなる書房)、コルボン『ベルリン』三部作(理論社)、エングレ『影の縫製機』(長崎出版)、テラ・フオン・ハルボウ『新訳メトロポリス』(中公文庫)、シーラッハ『犯罪』、ラルフ・イーザウ『緋色の楽譜』(ともに東京創元社) ほかも多数。

さくまゆみこ (欧米児童文学・アフリカ文学翻訳家):

青山学院女子短期大学教授。子どもの本を架け橋にしてアフリカと日本を結ぶ「アフリカ子どもの本プロジェクト」代表。著書に『エンザロ村のかまど』(福音館書店) など。訳書にホワイト『シャーロットのおくりもの』(あすなる書房)、ペイヴァー『クロナカル千古の闇』シリーズ(評論社) など多数。

那須田淳 (作家):

著作に『ペーターという名のオオカミ』(小峰書店・産経児童出版文化賞、坪田譲治文学賞)、『一億百万光年先に住むウサギ』(理論社) など多数。訳書にハツケとソーラ『ちいさなちいさな王様』(講談社・木本栄共訳)、北見葉胡とのグリム童話絵本シリーズ(岩崎書店) など多数。ベルリン在住。青山学院女子短期大学講師。

日本ペンクラブ主催シンポジウム

# 『えっ、訳でこんな に違うの?』

～新訳チームの中で、翻訳の  
楽しさ、難しさを考えてみよう～

## 世界と日本の子ども本から

いま、名作をもう一度、新しい訳で読み直そうと、新訳が相次いで出版されています。時の流れの中で、私たちが使っているふだんの言葉や、モノのイメージが変わってきているせいなのかもしれません。

たとえばモンゴメリーの『赤毛のアン』。原題は『グリーンズゲイブルス(緑の切り妻屋根の家)のアン』ですが、最初に日本に紹介した村岡花子さんが『赤毛のアン』としてから、掛川恭子さん、松本侑子さんなど多くの方がこれまでに訳を出されています。その訳も、それぞれどこか違います。

今回は、そういう訳の違いや苦労、また、国際化時代で、日本の童話や小説が海外にどんなふうで紹介されていくのかなど、翻訳のことを幅広く、第一線で活躍されている作家や翻訳者をお招きして、きいてみたいと思います。

☆子どもゆめ基金

(独立行政法人国立青少年教育振興機構) 助成活動